B 4

玉縁の縫製について　第2報　スカラップに縫製する場合

九州女大家政　藤弘　洋子

目的　第1報に於ては凹型と凸型の玉縁縫製について、各々を単独に半円試料とした場合、美しく仕上がるためのつり分量（凹型）といせ込み分量（凸型）について検討した。そこで今回はその凹凸が連続した場合、すなわちスカラップ状態に玉縁をとる場合について、縫製実験を行なった。

方法　試験布としては伸びの少ない綿のブロード、ギャバジンと比較的伸びが大きいウールのジョーゼット、ジャージーの4種類を用いた。スカラップとしては(1)半径7cmの半円を凹凸にそのまま連続させた場合と、(2)凸部は半径7cmの円弧の一部を地縫線とし、その山から1.5cm下った水平線上に小さい凹部の地縫線が通る程度のスカラップの場合について検討した。いずれも玉縁布は右45°バイアス布で玉縁幅を0.8cmとした。

結果　(1)の場合のスカラップは、前回と同様なつり分量といせ込み分量で、いずれの布についてもきれいにおさまった。しかし(2)の場合のスカラップは凹部分の曲率半径が小さいため、凹部は地縫い寸法と凹部出来上り寸法の差をつり分量とし、凸部のいせ込み分量は前回に従ったが、凹部にたるみが生じたので、凸部のいせ込み分量を更に少なくして縫製を試みると、ウールのジョーゼットとジャージーの場合は美しいスカラップに仕上げることが出来た。しかし、綿ブロードとギャバジンは常にたるみが生じた。これらの結果から、玉縁布がバイアス布で伸びが容易であると共に凹部分の玉縁布のきれいなおさまりは、逆に一定長さ分だけ布地構成上により如何にいせることが出来るかによるものであることがわかった。